

続・黒猫たちの御食宴



GUST







やっ……

ダメ……
……

ひん……

ま

あっ

ひん……

こんな夜更けに
何じにきたのよ
アンタは……

今イイところなんだから
ジヤマしないで
ほしいわね……



先程あなたが殺した
機銃の下部組織の者が
下手人を捜しています……

もう少し
用心した方が
良いのでは……



ダメ……

クロエが
見てる……



バカね……

んっ



だから
イイんじゃないの……



そお？
じゃアンタは
外を見張ってて

私は機銃を
守ってるから

あ

ん

ん





珍しいわね
アンタがこんな簡単に
後ろを取らせるなんて



知ってそのヤク...も...
女でもあり...
男でもある
アンタの身体のこと...



在園で介抱した時
じっくりたっぷり
噛めなげうもいっせ...



来ないで!!



それ以上
近づいたら...

たとえあの子の
お友達でも.....

冷たいわね...

さっきは
危ない所を助けて
くれたじゃない?



あ……あなたを
助けたくなんか
ありません……

ただ……

ただ……
あの子の
悲しむ顔を……

もう二度と
見たくないから
……

露香と
したいんでしょう？

え……

ほら……
もうこんな
カチカチにして……

あ……やっ……

素直に
なんなさいな

露香……

あの子を
汚して……

やぎて……

あんなに
可愛いの……

あ……















◆こんには。春風ソヨグです。かなり間があいてしまいましたが「続・黒猫たちの饗宴」をお届けします。ウチは霧香たん総受けサークルなので、今回の本は霧香ファンには諸手をあげて喜んでもらえると思っていますが、クロエをあーゆー存在にしたことについてはクロエファンの動静が気になるところであります。ま〜、自分的には三人共にメダタシメダタシにできて良かったかなーと思ってますけど。でも、世の中にはフタ〇リってだけでダメって人もいるっていうし……。霧香についてても、自分はOKなんですけど。

◆三人のそれぞれの心情については、あまりシリアスに考えないでくれると助かります（エロコメですから）。脳天気なミレイユと霧香に対して、唯一クロエが「あなたを助けたくなんかなかった」とネガティブな感情を吐露しますが、これにミレイユが真正面から向き合うとドロドロになるだけですー。むっ…ミレイユ、やけに大人ー（やけにSでもあります）。この本の今後の展開については無責任に「ミレイユ、頑張れ〜」としか言えないのでした〜。

◆まよ今更自分が書くこともない周知の事ですが、クロエは俗世の垢を一切つけてない完璧純粋無垢な超人存在などではなく、嫉妬もすれば独占欲もある普通の子であるわけで…。実は当初、クロエには、霧香やミレイユと比べてあまり魅力を感じていませんでした。自分が、無邪気さ故の残酷さというものに対してあまり寛容ではない、というのも一因なのかなー？クロエを初めていいな〜と思ったのは、18話「私の闇」でミレイユの危機を霧香に教えに来るところでした。でもそんな自分でも、24・25話のクロエは本当に可愛くかつ可哀相で…。そーか！精神的にだけではなく、肉体的にも霧香と結びつけてあげたい…そんな思いがこのマンガには込められているのではないのでしょうか！

◆そーいや、霧香はお風呂やらみそぎの沐浴やらの時クロエの身体を見てたんちゃうん？何も反応なかったぞ？というご意見もあろうかと思いますが、黒霧香はそーゆー事には無頓着、白霧香に戻ってもその時の記憶は完璧ではなかった…とゆー事でひとつ。ただし白霧香はミレイユの教育もあり、興味はシンシンという脳内設定。

◆今回のテーマは、前作よりも霧香は小さくミレイユは大きくだったのですが……今イチ。クロエも大きすぎたかな〜と。乳は難しいですね。精進精進。

◆NOIRファンサイト『NOIR LAND』では、2002年3〜5月にかけて大型企画「療養所物語」が進行しています。自分もSS（書くのは初めて）やイラストで参加させてもらうつもりです。ネット環境にある方はご覧になってみて下さい。

◆その「療養所物語」に参加され、また自分が前回「黒猫たちの饗宴」の後書きで紹介したHP『HEAVENLY BLUE』のちばなさんから素敵なSSを寄稿していただきました。「黒猫」の裏表紙を見て作られたとか。どうもありがとうございました！

◆「黒猫たちの饗宴」を買って下さった方、感想を送って下さった方、そしてこの「続・黒猫」をここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました。短いですが、この辺で。また次の本で〜。クロ霧の続きとかミロ霧とかで、軽〜いアホエロ話描くかも？

『大好きなミレイユ』作：たちばな (HEAVENLY BLUE)

真っ白な雪がしんしんと降り積もった、静かなその晩。
ベッドから身を起こした金髪の女性が、かたわらに眠る
黒髪の少女の横顔をじっと眺めていた。

「ん…ミレイ…ユ？」

「ごめん、起こしちゃった？」

「ううん、なにしてるの？」

「なんでもないわ。ただ霧香の寝顔を見てただけよ。

あんまり安心しきったような、無防備な顔をしてるから、つい…」

「つい、どうしたの？」

「おばかさん、なんでもないって言ってるでしょ」

いたずらっぽい微笑を浮かべた金髪の女性が、黒髪の少女の
頬に口づけた。

「いけない子」

「どっちが？ミレイユのばか…」

「ごめんなさい、なんだかふと不安になってしまって。

霧香が私のそばにいてくれる幸福なこの光景は、本当に
現実なんだろうかって。手を伸ばしたら消えてしまう
幻のように思えて」

「ミレイユ…。大丈夫、安心して。私たちは巴里に帰って
これたんだから。それにもう私はどこへも行ったりしないから。
ずっとミレイユのそばにいるから」

黒髪の少女が手を伸ばし、金髪の女性の頭をその胸に抱き寄せた。

「き、霧香!？」

「しっ、静かに！…ね、聞こえるでしょ、私の心臓の音」

「…」

「私は幻なんかじゃない。ちゃんと生きてここにいる。

大好きなミレイユのそばに」

「…霧香…」

あふれる想いに突き動かされるように、金髪の女性が
黒髪の少女に口づけの雨を降らせた。

その小さな頬に、そのつぶらな目もとに、その上気した
柔らかな頬に、そして、薄紅さすその白い胸元に。

ほのかな雪明りに照らされたその部屋で、二人は溶け合う
ぬくもりに包まれながら眠りに落ちた。

互いの優しい想いに抱かれるようにして。



二人でお願いすれば
きっとミレイユは
許してくれるから...



三人でって事でいいわね？



の時は

私と霧香だけにしてね



の時は

泊まってもOKよ



の時は

霧香……



続・黒猫たちの饗宴

2002年5月1日発行

印刷所/榊高山

編集/発行/GUST

連絡先/☎152-0022

東京都目黒区柿の木坂2-10-4

小杉荘10号 窪田浩一

E-Mail/hal-21@h3.dion.ne.jp

～続・黒猫たちの饗宴～



春風ソヨグ / GUST
ADULT ONLY